

■ 書評 ■

広田 照幸 [著]

『教育言説の歴史社会学』

京都大学 竹内 洋

本書は著者が90年から書き始めた主として教育言説研究に関する論文を収録したものである。教育言説に最初に関心をもったのが著者29歳のときというから、10年以上の年季がはいた研究論文の収録である。「あとがき」に、著者は、若いころ教育（的意図に満ちた）言説の美しさにどっぷりひたったことと、そのことによる挫折体験が契機になって、教育に関する言説研究が重要とおもうようになった経緯を熱く語っている。裏切られた「許せなさ」が空回りするのではなくルサンチマンの毒が冷静かつ克明な史料の吟味、解釈の手續きという学問的情熱に昇華され、見事な秀作群として結実している。

著者は、まず序章（「教育言説の歴史社会学」）で、教育の「実態」よりも「教育の語られ方」に揺らぎが大きいとして、教育の語られ方のアプローチについての著者の立場を新しい教育学や社会構築主義と比較しながら明らかにしている。著者によれば、ふたつのアプローチ（新しい教育学と社会構築主義）は、知見が一般的すぎるか、抽象的になってしまおうとし、著者の立場を「具体性を失わないで歴史的に再検討してみる」（6頁）アプローチだという。歴史的パースペクティブにもとづいた中範囲の言説研

究の意味が宣言されている。

本論は、第一部〈教育的なるもの〉の系譜、第Ⅱ部「選抜をめぐる言説史」、第Ⅲ部「社会化言説をめぐる諸問題」、付論、結論から成り立っている。序章をいれて全部で13本の論文から構成されている。どの章も今日的教育社会学のトピックを既存の研究を踏まえながら、綿密なデータ解析によって著者の独自の知見に導いていく技は見事である。本書を含めてクオリティが高い論文を次々に生産する著者の力量に敬服するばかりであるが、本書の圧巻はなんといっても「教育的」の誕生と展開を扱った第Ⅰ部にある。われわれも「理屈ではそうだが、教育的にはねえ」とか「この際教育的配慮として」と「うさんくさい」ことは百も承知であるにもかかわらず「教育的」をいまでも使用しているが、そうした言語魔術の立ちあがりや展開について教育雑誌を中心に丹念でこれでもかというほどのトレースをし、「教育的」が現場で「都合よく解釈され、正当化の論理として利用される」（57頁）原初形態が克明に焙り出されている。教育が政治や経済から切断された自律した領域になることによる教育（学）的言説空間の誕生を明らかにする。著者の宣言——評者の言葉でいうと歴史的パースペクティブにもと

づいた中範囲の言説研究——のみごとな成果であり、著者の記念碑的論文である。今後も長く多くの人々によって参照される論文となるだろう。

しかし、第Ⅰ部と比べると第Ⅱ部、第Ⅲ部に収められた論文の多くは、言説研究とはいいいにくいものも含んでいる。言説研究とは言語と実態の対応関係を括弧に括って、言説と言説空間それ自体の社会的事実性に着目して分析する研究（もちろんここらあたり厳格派と折衷派がある）である。第Ⅰ部にはそのような姿勢が貫かれているが、第Ⅱ部以下においては、たとえば、第5章（「学歴主義の制度化と展開」）、第11章（「青少年の兇悪化」言説の再検討）は、学歴社会言説や兇悪化言説を実態データによって誤認を明らかにする論文である。むろん論文として教えられることは多いが、これをあえて言説研究という必要があるのだろうか。本書が著者の論文集であることからくるのかもしれないが（第5章の冒頭において「本書の他の多くの章と、実態に関心を寄せる本章とは、アプローチの仕方が少し異なっている」ということわり書きがなされているが）、著者の若い研究者への影響力の大きさを考えると、言説研究をバブリーな研究領域にすることに貢献してしまうことがないことを祈りたい。

著者は前著（『陸軍将校の教育社会史』）で、軍国主義をイデオロギーの内面化よりも儀礼をつうじて浸透するさまを描いた。教育言説の再生産についても同じようなことがいわれないのだろうか。著者は若いときに「教育（的な意図

に満ちた）言説」にどっぷりひたり苦いおもいをしたというが、教育的言説の再生産は「内面化」でも「盲信」でも「共感」でもなく、儀礼的な用語と文法として手形が切られ流通し、物象化してしまうのではなかろうか。ここらあたりの前著との関係も教えてもらいたいものである。

もうひとつある。評者は著者の知見である教育が政治や経済と切断されてできあがる教育（学）言説空間の誕生におおいに教えられたが、つぎのような疑問もある。界の分化と自律化はいつてみれば近代社会的現象である。芸術も学問も政治や経済から切断され、自律した界を形成し、独自の言説空間が誕生する。だから「芸術的」や「学問的」という言葉が氾濫するのと同じ意味で「教育的」という言葉が氾濫するのはなにも不思議なことではない。教育的言説空間の成立も不思議ではない。不思議なのは、「芸術的」や「学問的」は芸術のための芸術や学問のための学問の領域を誕生させることで、無償性や価値への崇高なコミットメントとして機能するにもかかわらず、教育的が「いかがわしい」言葉として機能してしまうことではなかろうか。芸術的や学問的にくらべて「教育的」は著者の見解とは反対に政治や経済との切断の病理ではなく、十分に切断されない中途半端さにあるとはいえないだろうか。実際、教育的を使用する人はそのレトリックを教育独自の言語で貫徹させることができなく、現実の効用をしばしば混入させ（ざるを得ない）る。いくつかの質問を書いたが、こうした質問自体、秀作に